

## 媒体としての〈女三の宮〉

辻 和良

### 要旨

媒体としての〈女三の宮〉—このテーマは、女三の宮という人物その人について考えていこうとするものではない。女三の宮の実質は、さまざまな人間関係の相を反映して、それまで見えていなかったものを見えるようにするはたらきにある。女三の宮という人物造型は、具体的には何も描かれていない、何者でもない存在—〈非在〉である。そのものとしては何も無いだけに、彼女の外界の相が見えてしまうという構図である。その意味で「媒体」そのものだと言える。

### キーワード：女三の宮、〈非在〉、媒体

本稿は、「女三の宮」その人について考えていこうとするものではない。女三の宮の実質は、さまざまな人間関係の相を反映して、それまで気付かない、あるいは見えていなかったものを見えるようにするはたらきにあると考えている。

女三の宮という人物造型を見ると、彼女が具体的には何も描

かれていない、何者でもない存在—〈非在〉であるということ、が理解できる。そのものとしては何も無いだけに、彼女周辺の相が見えてしまうことになる構図である。その意味で「媒体」そのものだと言える。

### 一 これまでの「女三の宮」

早くに石田穰二は、「初から女三の宮に、普通の意味での心理などいふものはなかった」、「柏木は、かくかくの人間として描かれてあるといった存在では実はない」と主張して登場人物自らがどうもしようのないところで動いている背後に、「作者の思惟」「作者の思想」を見出そうとした。特に女三の宮については、

(夕顔との比較があつて) これに対して女三の宮といふ人物は性格を欠く。この女性が若菜上の冒頭、異様な幼さに生きる人間として、我々に紹介されて以来、少なくとも彼女を理解すべき手がかりは全く表情のない、殆ど白痴的な肉体としてしか、我々に提示されない。

(女三の宮の) この幼さは、年齢からも説明され得ない。説明

され得ないといふ事を、作者は今迄主張して来たやうに見える。宮の無抵抗性とは何か。私には、全く普遍的な、精神のひとつの主題、その奇態な輪郭をひく事だけしか可能ではなかった。原質そのもののやうな思想の姿と見える。

というように論じている「石田一九七二」。

野村精一も女三の宮について、

さて、この朱雀院、源氏、柏木の三人が、それぞれに対象とした、この悲劇の女主人公たる女三宮自身についてはどうであろうか。その無性格さ(あるいは非性格)についてはすでに述べられる所が多い。「げにまだいとちひさく、かたなりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若び給へり」という源氏の第一印象は一貫して―少なくとも出家の意志を示すまで―変わるところが無い。この事(女三の宮に対する光源氏の認識)が、悲劇の一条件であった事もまた重ねて言う必要もあるまい。ただこの無性格さ、人間的な空虚さが、女主人公のそれとして設定された事の意味は考えておきたい。これは元来、かぐや姫・あて宮以来の、非情なる女主人公の系譜の到達かもしれない。

この物語的なるものと現実との二つに支えられて生れた女三宮の造形は、更に後に述べるように、外見のみは華麗な、そしてその内容において空虚な、かの宮廷世界そのものの象徴であろう。

と述べ、主体性を持たない―愛の実質が伴っていない女三の宮の存在を宮廷社会の「空虚」さを象徴する典型的な人物造型であると指摘している「野村一九七五」。

ここに示されている〈女三の宮〉像は、今もって新鮮である。彼

(二)

女の本質的な理解は、このような早い時期にすでに示されていた。しかしながら、女三の宮が「異様な幼さに生きる人間」だとしても、また、物語の系譜として彼女の「無性格さ、人間的な空虚さ」があったにしても、やはり依然としてその主題論的達成については今だ論じ切れないと言わなければなるまい。<sup>3)</sup>

先行研究が示す〈女三の宮〉像を承けつつも、彼女の周辺に広がる人間関係を総体として理解しようとする発想に立って、彼女の主題論的達成を統合的に理解していきたい。

## 二 朱雀院、女三の宮そして藤壺女御

女三の宮について論じる時、常々彼女の「幼さ」が取り沙汰されるが、それに伴って、父親である朱雀院の心配する気持ちが語られてきた。しかし、朱雀院にとって、何故、女三の宮の事を他の子供たちと異なっており、そのように気に懸けなければならないのか、という点に関して、桐壺帝の〈源氏幻想〉と藤壺女御との関わりという方向から論じたことがある「辻二〇一四」<sup>4)</sup>。それを踏まえつつ、改めて女三の宮を支点として考えていきたい。

若菜上卷冒頭近く、朱雀院の子供たちについて次のように語られている。

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなん四ところおはしませしける。その中に、藤壺と聞こえしは先帝の源氏にぞおはしませしける、まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とり立てたる御後見もおはせす、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてもしたまひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の尚侍を参ら

せたまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなほきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづききこえたまふ。そのほど御年十三四ばかりおはす。「今は、と背き棄て、山籠りしなん後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてものしたまはんとすらむ」と、ただこの御ことをうしろめたく思し嘆く。(若菜上(4)11)

女三の宮については、彼女のことよりもむしろ、彼女の母親のことが詳しく述べられている。その藤壺女御は、「世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし」と語られている。それは朱雀帝の退位を、「かひなく口惜しく」思う余りのことだと理解できる。しかし、藤壺女御は「その筋となくものはかなき更衣腹」の内親王で、「とり立てたる御後見」もない。そのような人が「世の中を恨みたるやうにて亡せたまひにし」と語られるには、一旦は将来に夢を抱いたことがなければならぬ。それが「まだ坊と聞こえさせし時参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人」と語られている内容だった。

期待しながら叶わず、意気消沈の中にまもなく他界したという点では、光源氏の祖母が朱雀帝の立坊決定に際して、同じようなことになっていた。もともと入内条件の整わない中で桐壺更衣の入内を取行し、さらに光源氏の立坊を期待するという、桐壺更衣一家の異常という外ない〈家の遺志〉がそこにある[辻二〇一]。

女三の宮・藤壺女御母子の場合はどうか。藤壺女御が抱いていた立后への強い思いも桐壺更衣一家の抱いていた強い思いであること

が想定できる。しかし、このとき決定的に異なるのは、藤壺女御自身が内親王であり、桐壺更衣一家を特徴付けていた、王権を求める〈家の遺志〉の緊迫感を持ち合わせていないということである。藤壺女御の詳しい紹介の記述は、桐壺巻の内容を背景に置くことによつて、それとは対照的に、〈源氏幻想〉に関わりつつも緊迫感のない「王権索求」の話を描き出しているのだと理解できる。

これは、〈ゆかり〉という面からしても、血筋として藤壺中宮、あるいは紫の上との繋がりが強く意識されているものの、中宮から見て同腹兄弟の姪と異腹のそれとの違いは大きい。前者に存在していた主題論的な緊張感<sup>8)</sup>は、後者には存在せず、言わば似て非なる〈紫のゆかり〉となっているのである。

一方、桐壺帝由来の〈源氏幻想〉に関わりなく、朱雀院にとつて藤壺女御の無念な思いは、なんとか報いておかなくてはならないことであつた。これも対照的に、桐壺更衣の思いを受けとめていた桐壺帝と重ねられた設定である。養育という点で朱雀帝と桐壺帝とを比べてみたい。

桐壺帝は更衣亡き後、光源氏の教育に熱心であつた。次の引用にその一端が表れている。光源氏の回想のことばである。

「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命幸ひと並びぬるは、いと難きものになん。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちこの道な深く習ひそ、といさめさせたまひて、本才のかたがたのもの教へさせたまひしに、拙なきこともなく、またとり立ててこの事と心得ることもはべらざりき。(略)」と、親王に申し

たまへば、

(総合(2) 378)

桐壺帝には、光源氏がどのように学んでいくべきか、その方向性が見えていた。それほどに真剣に光源氏の教育に取り組んでいたのである。その点では、朱雀院も藤壺女御の「恨み」を理解していて、女三の宮を熱心に教育していた。例えば光源氏が次のように嘆息するところから、少なくとも周囲はそのように理解していたことが分かる。

「院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと世人思ひためれ、をかしき筋になまめき、ゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへるを、なぞてかくおいらかに生ほしたてたまひけん。さるは、いと御心とどめたまへる皇女と聞きしを」と思ふもなま口惜しけれど、

(若菜上(4) 66)

光源氏二十九歳二月に朱雀院は讓位している。この時期からそう遠くない時点で、藤壺女御は他界したということになるうか。朱雀院の出家は、光源氏三十九歳十二月で、この時女三の宮は、十三、四歳であった。逆算すれば、女三の宮は五歳になる前に母女御と死別したことになる。それ以降、光源氏に託されるまでのほぼ十年間ほどが朱雀院によって養育された期間となる。

朱雀院はおそらく父としてできる限り熱心に女三の宮を教育したのだろう。しかし、光源氏から右のように思われてしまっていては、女三の宮教育が成功したとはとても言えない。池田節子が光源氏の教育と比較して、「朱雀院の教育のまずさは歴然としている」と言うとおりである〔池田二〇〇六〕。

藤壺女御の恨みを晴らすということそのものが主眼論的に浮いてしまっている。それは、藤壺女御の恨みが晴らされないまま、物語

内に投げ出され、それゆえに物語内で意識され続けているというところである。「恨み」が流離うのは、内実が語られない「空虚な存在」である女三の宮を核にしていることによる結果である。

### 三 「正妻」の欠如―創り出されていく意味

女三の宮の結婚については、ずいぶん早くから高い水準の議論がなされてきた。今井源衛は、当時の皇女降嫁観に基づき、朱雀院の性格的な弱さを考慮して、光源氏との婚姻の判断を誤った「錯誤の人」として語られている、とする〔今井一九八二〕。秋山虔は、光源氏を婿がねに決定するほかにように状況を詰めていく若菜巻の表現のあり方に着目する〔秋山一九六四〕、そして野村精一は、「院の根本的な判断の誤りは、源氏という人物についての評価、つまり彼に対する信頼にあったのではないか」と、朱雀院の光源氏評価の誤りが、女三の宮事件の原因だとするのである。〔野村一九七五〕

いずれも今だに色あせない論であって、依って立つべき論である。しかしながら、根本的に大切なことは、光源氏を動かし、朱雀院を動かしたのは、「准太上天皇」光源氏に相応しい「正妻」の欠如状態だったということである。次の引用は、女三の宮の乳母と話す弁のことばである。傍線部にそれがはっきり出ている。

方々につけて御蔭に隠したまへる人、みなその人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおほえ具したるやおはすめる。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたくひたる御あはひならむ」と語らふを

(若菜上(4) 25)

乳母と弁との話の流れは、そのまま朱雀院に引き受けられている

かの六条の大殿は、げに、さりとももの心えて、うしろやすき方はこよなかりなを、方々にあまたものせらるべき人々を、知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかに落ちゐて、おほかたの世の例とも、うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり。さらで、よろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。

(若菜上(4) 28)

傍線部のように朱雀院が判断できるのは、先の帝の鍾愛の娘であり、今上の妹であるという、女三の宮の特権的立場があればこそである。次の引用は、光源氏が朱雀院の意向を拒否する姿勢を示した時の、弁の口説きである。

弁は、おほろけの御定めにもあらぬを、かくのたまへば、いとほしくも口惜しくも思ひて、内々に思し立ちにたるさまなどくはしく聞こゆれば、さすがにうち笑みつつ、

(若菜上(4) 34)

ここで、弁は傍線部にあるように、光源氏に朱雀院の決定を伝え、一心に説得を試みる。その時に、光源氏に見合った正妻のいないことが世間の常識からして極めて不都合であること、それには女三の宮が最適であることが強く主張されたことは、これまでの弁の主張から容易に推察できる。だとすると、それに対して、「さすがにうち笑みつつ」という光源氏の反応は、その論理を引き取ったものであると理解してよい。光源氏が女三の宮との婚姻を承諾するについては、女三の宮が藤壺の血縁に当たるということも大きな要素としてあるのだが、やはり社会的に「正妻の欠如」を解消する事のできる女三の宮の立場があればこそのことである。横笛巻にその点に関わって次のように語られている。

みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり。あまた集へたま

へる中にも、この宮こそは、かたほなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくともしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつること、と思すにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく、なほ口惜しかりける。

(横笛(4) 339)

これは、語り手のことばではあるが、光源氏の思惟にそのまま流れ込んでいる表現であるだけに、光源氏自身の思惟を表している判断してよい。その「あまた集へたまへる」女性たちとは、言うまでもなく、紫の上を始めとする六条院内の女性たちのことである。その中で、女三の宮こそが「かたほなる思ひまじらず云々」と思える女性だったにもかかわらず、つまらないことになってしまった、何とも彼ら二人の「過ぎにし罪ゆるしがたく」と、光源氏の思惟は続いていく。女三の宮の担っていた「価値」が如実に表れているところである。

一方、光源氏が朱雀院に会って、最終的に女三の宮との婚姻を承引する場面は次のように語られていた。

六条院も、すこし御心地よろしくと聞きたてまつらせたまひて、参りたまふ。御賜ばりの御封などこそ、みな同じごと遜位の帝と等しく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式にはうけぱりたまはず、世のもてなし思ひきこえたるさまなどは、心ことなれど、ことさらにそぎたまひて、例の、ことごとしからぬ御車に奉りて、上達部などさるべきかぎり、車にてぞ仕うまつりたまへる。

(若菜上(4) 39)

光源氏が臣下として、「准太上天皇位」という特例的な位にあることの限界がここに示されているのではあるが、しかし、そのこととは別の意味で、光源氏は傍線部のごとく、仰々しく形式的、公的

に表現され、権威化された形で扱われている。すなわち、「遜位の帝」に準じる光源氏には、その身分に相応しい女性が伴侶として必要である、という世間の「常識」が反映した表現となっているのである。「(身分に相応しい) 正妻の欠如」は、光源氏にとって重大な欠損として「世間」は理解していたということである。

しかし、それはそうでありながら、改めて考えてみると、藤裏葉巻で光源氏が「准太上天皇」になった時に、紫の上の身分の問題は全く浮上していなかったはずだ。明石の姫君の入内に付き添って後、宮中を退出する時に紫の上が女御待遇を与えられたことなどは、光源氏が「准太上天皇」位を得たのが、その翌年であることを思うと、むしろ『源氏物語』は、光源氏の「正妻」に相応しく紫の上を遇したものと理解してよいのではなかったのか。だとすると、右にみえてきた、光源氏の「正妻の欠如」観とはどういうことなのだろうか。振り返れば、女三の宮は、鳴り物入りで六条院に興入れしてきた。かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。

(若菜上(4) 55)

先帝の娘、春宮の妹が「准太上天皇」光源氏に興入れするのであるから、このように格式張った表現になるのも首肯できるものの、それと対照的に「姫宮」本人は、

げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき  
気色して、ひたみちに若びたまへり。(若菜上(4) 56)

と、格式にそぐわない様体に描かれている。これは光源氏の印象であるが、そのままに女三の宮の本質である。

女三の宮と光源氏との婚姻は、朱雀系皇統にとって権威付けのために必要なことであり、朱雀院の判断は相応しいものであったという論が出されていた[石津一九七四]<sup>⑤</sup> [今井一九八九]<sup>⑥</sup>。「朱雀系皇統」

の保全という見方は斬新なものではあるが、朱雀院が桐壺帝の直系として存在したことの意味を理解すると、「朱雀系皇統」という独立したものを想定する意味が見出しにくい。さらに、女三の宮の処遇が朱雀院の出家直前になって慌ただしく取り決められていたことを考えるならば、彼女の処遇に右に触れたような皇統の権威に絡むような重い意味が込められているとは思えない。従って、女三の宮婚姻についての朱雀院の判断が妥当なものであったと考える意味も見えてこないのである。

言わば後出しじゃんけんのように遅れて登場する女三の宮は、それでも物語の立派な登場人物のように、厳かに親の素姓から語り出される。しかしそれは、女三の宮そのものの意味や価値が何か確かなものとして存在していることを意味するものではない。中身のなるところから意味が創り出されていくことを標付けていたということである。光源氏の「正妻の欠如」が創り出されてきたことと表裏合わさる関係となっているのである。

物語内世界の現実としてみれば、光源氏にとって「世間の掟への服従」ということであり、紫の上にとっては、女三の宮登場の意味の創出過程で、いみじくも自ら抛って立つ基盤の脆さに気付かされる羽目になってしまったということである。

かつて、高橋亨が

新しい物語の主人公としての登場を形式的に与えられながら、あまりに反主人公的な女三宮の性格描写は、そのことじたいが  
主題的なのだといえよう。

と言ったが[高橋一九八二]<sup>⑦</sup>、もう少し、「反主人公」とされた存在のあり方を分析していきたい。そうすることで、さらに女三の宮の実態に迫れるのではないかと思う。

#### 四 紫の上の〈あきらめ〉——存在基盤の崩壊

女三の宮の登場によって、自らの存在基盤の脆弱さを知らされた紫の上、という構図は、結果的にそのようにできてきた、つまり人と人の関係性の中で紫の上の立場が彫り込まれていった、あるいは、これまで存在していなかった認識が「創り出されていった」という理解が大切である。それを紫の上という登場人物に則して言うならば、〈あきらめ〉の過程、すなわち、紫の上が事の本質をはつきりと識る過程である、ということが出来る。前節の創り出されてきた、「正妻の欠如」と照応する関係にあることは見やすい。

紫の上は、「女三の宮事件」について言えば、次に引用するように朝顔の齋院の時の例を思い起こして、当初はまったく心配していなかった。

紫の上も、かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、「さしもあらし。前齋院をもねむごころに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを」など思して、さることやある、とも問ひきこえたまはず、何心もなくしておはするに、  
(若菜上(4) 44)

ところが現実とは違っていた。光源氏と女三の宮との婚姻は成立してしまつた。そのことを光源氏から知らされた紫の上は、次のように反応している。

いとつれなくて、「あはれなる御譲りにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなを、かの母女御の御方ざまにても、疎からず思し数まへてむや」と、卑下した

まふを、

(若菜上(4) 46)

「いとつれなくて」と平静を装うところに、紫の上の精神的衝撃の大きさと矜持とが表れている。紫の上は、あまりの衝撃の強さゆえに逆に動揺を押さえ込もうとしているのである。それに続く彼女のことばは、光源氏も驚くほどあっさり婚姻を受け入れる内容——大層「卑下」した内容の発言である。傍線部「めざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなを」などと、女三の宮からみて、自分は「めざまし」い存在であるとする言ひ方は、確かに今上の妹である内親王との身分的比較から言えば、この通りかもしれない。しかし、卑下の程度が強過ぎないか。その一方で「かの母女御の御方ざまにても云々」と血縁的に繋がる間柄でもあると表明するところには、紫の上の矜持も否定できず見えている。

次の心中思惟は、紫の上の実情をもの語っている。

心の中にも、「かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひ難きを、憎げにも聞こえななじ。わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず。堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすほるるさま、世人に漏りきこえじ。式部卿宮の大北の方、常にうけはしげなることどもをのたまひ出でつつ、あぢきなき大将の御事にてさへ、あやしく恨みそねみたまふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせたまはん」など、おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。  
(若菜上(4) 47)

傍線部にあるように、「わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想」なら怒ることもできようが、今はそれとはまったく対照的な「堰かるべき方なき」状

況なのだから、紫の上は怒ることもできずに、心の叫びを封じられてしまっているということである。彼女はひたすら堪えるしかなく、「をこがましく思ひむすほほるるさま、世人に漏りきこえじ」と、その精神的惑乱を周囲に識られまいとして平静を装うほかないのである。わずかに残る矜持がその行為を支えている、という構図である。このとき紫の上は、自分がこれからどのように存在し得るのかについて、まったく何の答えも持ち合わせていない。

これまでの体験によって手に入れた自信はもろくも崩れた。

今はさりとて、とのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人わらへならんことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。(若菜上(4) 48)

「今はさりとて」という自信は、例えば光源氏と朝顔の齋院との「婚姻」騒動を克服してきたことなどが大きく関係して成立しているだろう。それだけにこの度のことについて、紫の上の自信喪失の衝撃はひとしお強いものになってしまったと言えよう。

朝顔の齋院との婚姻が噂されたのは随分以前のことになるが、それを基にして紫の上は今回の女三の宮とのことを「経験の範囲内」で処理できることと思ってしまったのである。しかし繰り返した現実には、歪みが生じてしまっていた。紫の上はその歪みを見誤って、翻弄されてしまう。

気付けば、紫の上の目の前には、〈女三の宮〉という媒体による関係の拡がりが存在していた。〈女三の宮〉の父朱雀院との関係、夫である光源氏との関係、〈女三の宮〉を核とする世間的関係性などである。そこにおいて、紫の上は、六条院内での自ら掘って立つ基盤の脆さを否応なく実感していくのである。それは、これまでにはついで考えたことのない問題であり、感じたことのない不安感で

あった。

〈女三の宮〉という存在によって、自らの立場をはつきりと識られていく、それはこれまで見えていなかったことが「創り出され」、それを明らかに識るという意味において〈あきらめ〉の過程なのであった。

## 五 満たされない柏木—幻想の恋

多くの『源氏物語』読者は、女三の宮を求めて止まない柏木について、「異常さ」を感じてしまうのではないだろうか。

紙燭召して御返り見たまへば、御手もなほいとかなげに、をかしきほどに書いたまひて、「心苦しう聞きながら、いかでかは。ただ推しはかり。残らん、とあるは、立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるる煙くらべに後るべうやは」とばかりあるを、あはれにかたじけなしと思ふ。「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな」と、いとど泣きまさりたまひて、御返り、臥しながらうち休みつつ書いたまふ。(柏木(4) 285)

これは、死期が近付いている柏木への、女三の宮の返歌である。柏木の歌は、「いまはとて燃えむけぶりもむすほほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」(柏木(4) 281)であった。宮は、柏木が「なほや残らむ」と言った、宮への思ひ(火)の煙と一緒に自分も消えてしまいたい、そのように辛い思いをしているのだ、あなただけでは無い、と返事する。これは、柏木の理解に基づけば、彼への愛情の印のように読めなくもない。しかし、

尼宮は、おほけなき心もうたてのみ思されて、世にながかれと



しも思さざりしを、かくなむと聞きたまふさすがにいとあはれなりかし。  
(柏木(4) 309)

とあるのを勘合すると、女三の宮が柏木に愛情を持っていたとは到底理解できない。だとすると、右の返歌は「後るべうやは」も含めて、女三の宮の意図としては、柏木一人が苦しんでいるように言っているが、とんでもない、私こそ決してそれに劣らず苦しんでいるのだ、と寧ろ抗議的口吻と理解するのが相応しい。そう理解すると、柏木は死の直前にあっても、誤解によって滑稽な人物を演じてしまったことになる。

宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬ事の恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるとついても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばや、と思す。  
(柏木(4) 290)

女三の宮は出産を経て、自らの辛い経験のみを回顧して、死を望もうとする。そこには、生まれてきた子供(薫)への、親としての思いや配慮は全く認められない。いかに無礼な振る舞いを為出かしたにせよ、子供までなした男の命を惜しまないばかりか、自分が腹を痛めた子供への配慮も見せないのである。女三の宮は、自らの気持ちの推移するままに動いていくだけで、自らには何らの変化も起こさないで過ごしていく。

このような女三の宮に翻弄されてしまう柏木は、女三の宮に何を求めようとしたのであろうか。それは、柏木の次の思惟をどう理解するかによる。

いはけなかりしほどより、思ふ心ことにて、何ごとをも人にいま一際まさらむと、公私の事にふれて、なめならず思ひのほりしかど、その心かなひがたかりけりと、一つ二つのふしごと

に、身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深くすすみにしを、  
(柏木(4) 279)

柏木が何を意識して、心に適いたい事の「一つ二つ」としているのか、具体的には指摘されていない。全集本頭注などには、女三の宮の婚選びに漏れたことが挙げられている。確かに、彼の落胆ぶりからするとそれがもっともらしいが、それはそれ以外にも描かれていないだけのこと、その他の理由を想定できないというに過ぎない。そのように思うと、ここでは事柄を具体化するのではなく、一般化というか、ともかく柏木は幼い昔から努力の人ではあったが、残念なことにはその望みがすべて適えられたわけではなかった、という押さえ方がよいのではないかと思う。柏木には、人生を満足できない要素が孕まれてあった、ということを理解したい。

〈女三の宮〉は、行き着くところ柏木の根源的な在り方、すなわち直接何が原因かというのではなく、「人生を満足できない要素」を抱えた在り方を炙り出している。まさに、「媒体」なのである。

〈女三の宮〉形象の主題論的意味を求めてきた。これまで論じてきたことから分かるように、一つの関係性―「媒体」としての存在、彼女がそこに在るだけで、彼女と関わるることによって周囲の面々のさまざまな事情、感情を浮き上がらせていく、「媒体」としての〈女三の宮〉と名付ける外ないは、たまたまとして『源氏物語』の中に位置付けていることに、それは求められよう。<sup>(17)</sup>

(注)

- (1) 「石田一九七二」石田穰二「女三の宮と柏木について」『源氏物語論集』桜楓社、一九七二、一一。
- (2) 「野村一九七五」野村精二「若菜巻試論―人間関係の悲劇的構造について」『源氏物語の創造 増訂版』、桜楓社、一九七五、一〇。
- (3) 本稿とは異なる方向性ながら、女三の宮を新たに読み直そうとする試みが西原志保「女三宮のことば―『源氏物語』の時間と内面―」(日本文学、二〇〇八、一二)、「源氏物語」女三の宮の政治性―続編における―(古代文学研究第二次 21号、二〇二二、一〇)でなされている。本文解釈に異なる点があり、必ずしも賛同できない。
- (4) 「辻二〇一四」辻和良「女三の宮の母「藤壺女御」という存在」、国語と国文学、二〇一四、一一。
- (5) 本文の引用は、小学館日本古典文学全集本『源氏物語』による。括弧内は、巻名、全集本巻数、頁数である。傍線・傍点は論者によるものである。
- (6) 「辻二〇一一」辻和良「源氏物語の王権―光源氏と「源氏幻想」―」新典社、二〇一一、一一。とくに第一章「月日経て、若宮参りたまひぬ」考。
- (7) 新日本古典文学大系『源氏物語』脚注には、「朱雀院の藤壺に対するあわれみは、心の中のみとどまって、形をとって外に表れることはなく、立后などのこともなかった。それを恨みとして残すふうで亡くなった」というとある。
- (8) 長谷川政春は、「女源氏の恋―女三の宮」(人物で読む『源氏物語』一五―女三の宮) 勉誠出版、二〇〇六、五)で、「男源氏の物語」である(光源氏物語)に対して、(女三の宮物語)は(女源氏の物語)として対応する」とする。藤壺女御の恨みに着目する点は良いが、桐壺更衣の「遺言」をそれと同列に並べる認識は、いささか乱暴である。また、繰り返し紫の上との「ゆかり」が述べられることをもって、「ゆかり」が主題性をもって語られて示す」とするが、それはむしろ対照的に表現されていると理解すべきかと思う。
- (9) 「池田二〇〇六」池田節子「女三の宮造型の諸問題―紫の上と比較して―」『人物で読む『源氏物語』一五―女三の宮』 勉誠出版、二〇〇六、五。
- (10) 「今井一九八二」今井源衛、「女三宮の降嫁」、改訂版『源氏物語の研究』、未來社、一九八二、八所収。
- (11) 「秋山一九六四」秋山虔『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四、一一。
- (12) 「紫の上が宮中を」出でたまふ儀式のいとことによそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを(藤裏葉③<sup>443</sup>)とあつた。
- (13) 「石津一九七四」石津はるみ「若菜への出発―源氏物語の転換点―」国語と国文学、一九七四、一一。
- (14) 「今井一九八九」今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」むらさき二六、一九八九、七。
- (15) 「高橋一九八二」高橋亨「源氏物語の(女三の宮)」国文学、一九八二、九(臨時増刊号)。
- (16) 「後るべうやは」について全集本頭注では、女三の宮の気持ちには「柏木に劣らず自分だってもっと苦しいのだ、という抗議もこめられていよう。必ずしもこの直前の柏木への同情ではない。彼女は柏木の理不尽な行動を恨みつづけている」と指摘されている。
- (17) 少し前になるが、関根賢司は、「女三の宮」論を概観して、「問題は、表現のありようを意に介さず、女三の宮の「性格」や「内面」や「人柄」が語られている(あるいは、いない)と見なして(人物論)を展開していく前提そのものの中に在る。」と批判している(女三の宮の歌―源氏物語の表現と主題―)國學院雑誌、二〇二二、七)。本稿は依然としてその批判の

範疇に在るのかも知れない。しかし、関根が、歌理解から主題論的存在として女三の宮を捉え、「存在論的主題」の拡がりを論じていくとき、そこに、本稿に述べている「媒体」と名付ける外ないはたらきに繋がるものを見出すことができるのである。